

無題序文における自己宣伝の機能

——太宰治の作品集『思ひ出』を中心に

小田桐 ジェイク

1、はじめに

太宰治の生前に出版された書物には序文や跋文が収録され、同時代の評価では、これらの序跋文が読まれ、注目されていたことが確認できる。『愛と美について』（竹村書房、一九三九・五）を評価する大谷好雄「太宰治著『愛と美について』」⁽¹⁾では、「読者に」の一部が引用され、「読む者の心へも同じ様なゆとりを目覚して呉れる」とある。また、浅見淵「太宰治」⁽²⁾では「作者はこの短編集のはじめに、いま割に幸福な平和な生活を営んでゐる旨を書きつけてゐる」とある。これらの評価は序文を意識して書かれていることがうかがえる。他に『新ハムレット』（文芸春秋社、一九四一・七）を評価する山岸外史「太宰治について 新ハムレット及び東京八景」⁽³⁾に、「はしがき」の文章がたいへんに好いといふことである。／（これは皮肉ではなく、彼がこの仕事の方針と計画に対して、充分な自覚と意識とをもつてゐたこ

とを、この「はしがき」で正確に裏書してゐるからである」とあるように、「はしがき」の内容が高く評価されることもある。

一方で、肯定的な評価ばかりではない。『富嶽百景』（新潮社、一九四三・一）収録『走れメロス』を評価する前に、荒正人「講座 なにを・いかによむか 太宰治の『走れメロス』」⁽⁴⁾では口絵写真や序跋文が取り上げられ、「じつは、作者の顔だの、前口上だの、それから亀井勝一郎の「解説」だの、いづれもどうだつていいことなのです」と述べられている。荒評は口絵写真や序跋文を重視しないが、取り上げること自体は「どうだつていい」ことではないという意図が裏にあるのではないか。

ただ、太宰の書物に収録された序跋文が常に注目されたわけではない。例えば『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ』（新潮社、一九三七・九）の「解題」をはじめ、『東京八景』（実業之日本社、一九四一・五）の「あとがき」、『風の便り』（利

根書房、一九四二・四）の「あとがき」などは注目された形跡がない。しかし、これらの序跋文の内容には注目すべき点がある。『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ』の「改題」では、「むかしからの私の読者も、心あらば、いまひとたび、この一系列の作品の、順序を追うに、併せて読まれよ」とあり、『東京八景』の「あとがき」では、「作者が、作品に説明を附けると、読者は、その説明文に頼り過ぎていけない」とあり、『風の便り』の「あとがき」では、「ペエジ数の都合で、「千代女」以前の作品も編入せざるを得なくなつて、心苦しいのであるが、いま此の機会に再読なさつても、充分に新鮮の感じがするやうに、心掛けて編輯した筈である」とある。そもそもこれらの序跋文の性格は異なつてゐるが、読者への意識や序跋文の解説への批判等があることはその書物を手にする人の関心を惹かせるだろう。

太宰治の書物や収録作品、それにおける作品像ないし作家像が従来の研究ではさまざまな観点から論じられてきた。例えば、紅野謙介著『書物の近代——メディアアの文学史』⁽⁵⁾では『晩年』（砂子屋書房、一九三六・六）の口絵写真が取り上げられ、この要素が太宰の後の作品にもつながることが指摘されている。井原あや「リパッケージされる太宰治」⁽⁶⁾は太宰没後の受容を映画化された作品や文庫本の表紙・ジャケットのデザインの変遷に則して考察している。斎藤理生「60年目の『人間失格』——パラテキストからテキスト

へ」⁽⁷⁾は太宰の生誕一〇〇周年前後にまつわる『人間失格』のさまざまな形を取り上げ、表紙やジャケットのデザインが読み方によつてどのような影響を与えるのかを指摘している。山内祥史著『太宰治の『晩年』——成立と出版』⁽⁸⁾は、特に書物と作家像ないし作品像を解釈しないが、書誌研究の観点から太宰の第一作品集『晩年』の成立から出版に至るまでの過程を明らかにしている。

このような従来の研究において、太宰の書物とそれにおける作品像や作家像との関係が論考されてきたが、序跋文にある言説がいかに太宰のイメージがつけられるのかという観点からは論考されてこなかった。本稿は、序文の内容とそれが作品像や作家像にどのような影響を与えるかを明らかにしていく。

序文や跋文といったパラテキスト的要素が読解に影響することは、ジェラルド・ジュネットが指摘している通りであるし、先にあげた太宰作品に対する同時代評価からも明らかである。ただジュネットは「序文の機能は序文のタイプに応じて異なるのである」⁽⁹⁾とも指摘している。つまり、一口に序文といつても、その役割は同じではない。

本稿では先行論の指摘を参照しつつ、一九四〇年六月に人文書院により出版された作品集『思ひ出』に収録されている六つの無題序文の意味と機能を考察する。更に、作品集『思ひ出』にしか見られない姿を重視することで、改めて序文に

おける自己宣伝という機能がどのような意味を持つのかを解釈する。

2、作品集『思ひ出』の全体構造と特徴

『思ひ出』は、五つの作品と随筆集から成る書物である。目次には「思ひ出／ダス・グマイネ／二十世紀旗手／新樹の言葉／富嶽百景・餘瀝 近事片々」とある。ただ、実際にこの作品集を手にする時、目次には載っていない六つの無題序文も収録されていることが分かる。

現在、個人全集などにはこれらの序文が『思ひ出』序」として収録されている。しかし、『思ひ出』においてはそれぞれの序文は無題であり、作品ないし随筆集の中扉裏側にある。例えば、作品『思ひ出』の前にある無題序文は図にある通りであり、序文と本文との間に隔たりがある。『思ひ出』を手にした人は、作品を読む前にこの無題序文を読む可能性が高いし、その文章が作品に関するイメージを与えることがある。したがって、無題序文の位置それ自体が重要である。

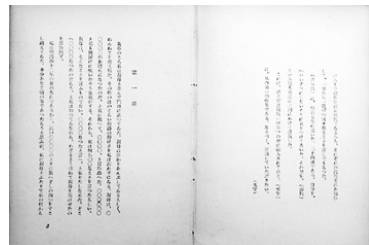
これらの無題序文は現在だと、作品ないし随筆群と物理的に隔てられている。もちろん、この六つの無題序文は全集などで読むことができるが、作品集である『思ひ出』と同じ形で読むことができなくなってしまった。

そもそも書物の序文にはどのような機能があるだろうか。例えば作品（群）の解釈や読解の提案、成立情報、解釈の提



中扉

空紙



本文

無題序文

案などの機能がある⁽¹⁰⁾。序文が作家自身によって書かれている場合だと、これらの機能は強化され、作家の意図や作意が含まれているように読み取れよう。必ずしもこれらの機能は全ての序跋文に備わっているわけではないが、序文が作品（群）から切り離されてしまうと、こうした機能と意味は変化してしまうのである。

『思ひ出』収録の序文の機能は後に詳しく見るが、その一つは書誌情報と作品との関係を示すことである。作品のいわゆる足跡が書誌情報であり、『思ひ出』収録作品はいずれも既に他の書物に収録されていることから、改めて収録する価値があると作家自身が判断したことがうかがえる。作品『思

ひ出』の無題序文の冒頭に「けふまで創作集が五冊出てゐるから、それぞれの出版主にお願ひして、一冊から一篇づつ抜き取ることを許してもらつた」という説明があるように、収録作品が特別に選ばれたことが示唆されている。これは、作家自身が新しい作品集のために、その作品集に合う作品を選んでいふことになり、作品の先に無題序文を読む前提になつてゐる。

全集などにおける再提示された無題序文の形をもう少し考へてみたい。まず、筑摩書房版『太宰治全集』に収録されている『思ひ出』序の提示され方は主に山内祥史論⁽¹⁾に従つていふと言へる。しかし、この形態は分かりやすさを求めて提示しようとするあまり、正確な姿ではない。本来の形では、各序文は無題であつたのに、全集では作品名が付加され、「太宰」ないし「太宰治」という署名がいずれの序文からも削除されている。更に、最も大きな変化は、これらの無題序文は中扉裏側にあつたのに、全集ではひとまとめにされ、列挙されている。このように、作品集『思ひ出』で提示される各無題序文の姿は大きく異なるものになつてゐる。全集だからといって作品と併読することができないわけではなく、別の場所に収録されているので人文書院版『思ひ出』とは同じような流れで読まれるとは限らない。

『思ひ出』収録作品はいずれも太宰の生前に別の作品集に改めて収録されたが、五作が共に提示されるのは人文書院版

『思ひ出』のみである。作品群の組み合わせだけではなく、六つの無題序文もそうである。日本近代文学館刊行「名著初版本複製 太宰治文学館」に、『思ひ出』が含まれていないのは興味深いことである⁽¹²⁾。その理由は「作品の初出単行本が収録本選定の原則」であり、『思ひ出』の収録作品はいずれも既に別の作品集に収録されていたので、複製の対象にならなかつたのだろう。国会図書館デジタルコレクションでは作品集『思ひ出』が見られるが、補修が行われたようで、表紙の装幀デザインや本扉が欠如している。こうした経緯を辿ることで、後に詳しく見るように、本書が人文書院のシリーズに属しているという情報がなくなつてゐる。

3. 単行本としての存在とその意味

太宰イメージに関しては、代表作『人間失格』『展望』一九四八・六〇八）が最も強い影響力を有している。一方で、初期作品『思ひ出』も太宰像と深く関わる。第一作品集『晩年』を読む人には、必ず読まれる作品である。『思ひ出』が作品だけでなく、作品集の書名にもなつてゐることは広く知られてゐない。現在の書店などで手に入れやすい書物としては新潮文庫版『晩年』があり、その中には奥野健男「解説」が収載され、その一部で『思ひ出』は語られている。

『思ひ出』は同人雑誌「海豹」の昭和八年四、六、七

月号に発表された。作者の幼年期、少年期を書いた自叙傳的小説で『晩年』の中心をなす処女作である。この作品と同じ時期の自分を、習作時代に『無間奈落』で、後年『人間失格』で扱っているが、それらの二作は共に自虐的にデフォルメされている。自己を徹底的に分析し、その実存的な本質をあらわにしようとする点において、『人間失格』は類い稀れな深さに達しているが、それに対して『思ひ出』はのびのびとして書かれた素直な自画像である。⁽¹³⁾

ここで注目すべき点は、『思ひ出』が『人間失格』と直接結びつけられているのに、作品集『思ひ出』に関する言説がないことである。作品『思ひ出』が『晩年』の中心をなす作品であるにもかかわらず、後に作品集の表題作になることは言及されていない。作品集『思ひ出』の無題序文の内容がまさしく『思ひ出』の自伝的作品の解説になっていることは無視し難いが、無題序文の代わりに、奥野「解説」は作品『思ひ出』の読み方を提供していることになる。

人文書院版『思ひ出』の収録作品はいずれも自伝的作品であるとされている⁽¹⁴⁾。例えば『思ひ出』と『富嶽百景』と『新樹の言葉』の三作は一人称語りで、リアリティのある内容から成り、いわば「私小説」を思わせる作風であるので、自伝的作品としての読み方が促されると言える。一方、

『ダス・ゲマイネ』と『二十世紀旗手』は前衛的且つ実験的、難解な作品であるため、自伝性が薄いだらう。しかし、『ダス・ゲマイネ』の登場人物の一人が「太宰治」と名づけられており、「自殺」も作中テーマになっているので、作家イメージと併せて読まれることがある。『二十世紀旗手』のエピグラフ「――(生まれてすみません。）」は後に太宰を表象するようになり、太宰の作家像としても受容されるようになっていく。更に、これらは『思ひ出』という自伝的作品の文脈と共に提示されることで、ジャンルが固定化されていくこともある。

ただ、作風だけではなく、無題序文には自伝的な読み方を促す言葉がある。例えば、『富嶽百景』の無題序文に「思ひ出」といふ標題を打つて、一本にしてみると、自らまた別の感慨も湧くのである。きのふまでの、三十年の、冗談でない思ひ出になってゐる」とあるように、作品集全体が自伝性を持つようになる。あるいは、『餘瀝 近事片々』の無題序文には「以上の五篇の創作にて、私のこれまで歩いて来た経過の、だいたいは、推察していただける事と思ふ」とあり、作品集は作家自身を振り返らせるものになる。更に、これらの無題序文には「(不幸)」ないし「太宰治」という署名がつけられているので、作家自身の言葉として、自伝性が強化されるとも言える。しかし、既に述べたように、こうした言説が作品群ないし随筆群と共に提示されるのは作品集『思ひ出』

だけである。無題序文が全集で提示されるようになったとき、「(太宰)」ないし「太宰治」という作家の署名は削除されてしまう。

『作品集『思ひ出』』の自伝性が、作品集内に収録されている作品群から発生することは、作風だけではなく、書物それ自体のパラテキスト的要素、特に無題序文の内容も大きく関係する。すなわち、作品集のレイアウトは作品の前に無題序文があり、「(太宰)」と署名され、作品集は作家自身が選んだ作品群から成ることも読み取れる。しかも、この五作及び随筆集が共にこの形で提示されるのは、作品集『思ひ出』においてだけである。特に作品の前に無題序文が設置されること単行本でしか見られないレイアウトであり、これらの序文の内容の自伝的な読み方を促す言説が特徴の一つである。更に調査すると、『思ひ出』は単独出版ではなく、より大きな文脈に位置していることも確認できる。

4、人文書院「作家自選」における

『思ひ出』の位置

作品集『思ひ出』の表紙装幀デザインにある「短篇傑作集」という文言は、従来の研究では重視されてきた。書名が『思ひ出——太宰治短篇傑作集』として提示されることもある⁽¹⁵⁾。しかし、『思ひ出』の奥付などを確認してみると、書名は「思ひ出」になっており、「短篇傑作集」は表紙と扉の

一部である。ならば、『思ひ出』の奥付にないが、表紙と扉にわざわざ「短篇傑作集」と書かれている意味を考察し、『思ひ出』が単独出版でないことの意味を明らかにする必要がある。

太宰治の書誌研究は山内祥史がほとんど一手に担っており、『晩年』をはじめ、『愛と美について』などの単行本に関する論考や書誌資料集などを発表している⁽¹⁶⁾。その中で、人文書院版『思ひ出』が取り上げられ、詳細に分析されている⁽¹⁷⁾。しかし、『思ひ出』が出版社のシリーズの一冊であることは言及されていない。作品集『思ひ出』それ自体には六枚分の広告及び宣伝があり、全て人文書院からの刊行物である。ただ、いずれも「短篇傑作集」という言説が付与されておらず、これは『思ひ出』が単独に出版された書物であると思われる理由になったのではないだろうか。

しかし、もし『思ひ出』が単独に出版されたもので、「短篇傑作集」はこの書物にしかない言説であれば、『富嶽百景』の前に付与されている無題序文の一部に「之等、五つの小説は、決して傑作では無い」という矛盾した一文をどのように読めばいいだろうか。表紙のデザインにある言説の全てが作家自身の意図を反映したものではないのだろうか、それを確かめるために、『思ひ出』の出版された時代の前後を見なければならぬ。確認できた範囲で、『思ひ出』と同じ一九四〇年の人文書院刊行の書物はおよそ三十五冊である。更

に調べてみると、「短篇傑作集」は人文書院のシリーズにながっていることが分かる。

人文書院のシリーズの正式な名前は「作家自選 短篇小説傑作集」（以降「作家自選」と称す）であり、一九三九年八月刊行の富澤有為男著『夫婦』という作品集から始まった。翌年十二月刊行の中村地平『陽なた丘の少女』でこのシリーズが終わり、計十五冊となった。太宰治の作品集『思ひ出』は六冊目として出版されたが、この事実は従来の研究において指摘されてこなかった。ならば、『思ひ出』がシリーズに所属していることはどういう意味を持つのだろうか。重視すべき点は、太宰治がこのように他作家と同じシリーズで出版され、作家のネットワークに所属していたことである。人文書院の「作家自選」の作家たちが、太宰治と他のシリーズでも作品集等を出していたことも確認できる⁽¹⁸⁾。作家同士の関係には、出版社側の出したい作家の選択肢もこうしたネットワークを形成する大きな要素であろう。太宰と他作家たちとのネットワークを明らかにするには更なる研究が必要だが、作品集『思ひ出』はこれまで人文書院のシリーズ「作家自選」の一冊として意識されてこなかったことをここで強調しておきたい。

更に、『思ひ出』は単独出版ではなく、シリーズの一部であるので、特徴的な無題序文の中身を他作家と比較できる。「作家自選」の作品集に収載されている序跋文の有無は表で

著者名・書名		刊行年月	叢書番	中扉序	序跋	目次示	叢書広告
1.	富澤有為男『夫婦』	1939年8月	13	○	○	×	×
2.	大鹿卓『千島丸』	1939年12月	14	○	○	○	×
3.	中谷孝雄『春』	1940年1月	15	○	○	×	○
4.	長與善郎『幽齋父子』	1940年1月	1	×	×	×	×
5.	中河與一『愛の約束』	1940年3月	2	×	×	×	×
6.	寺崎浩『森の中の結婚』	1940年3月	4	○	○	×	○
7.	外村繁『風樹』	1940年4月	5	○	○	×	○
8.	太宰治『思ひ出』	1940年6月	6	○	×	×	×
9.	丸岡明『或る生涯』	1940年7月	7	○	○	○	○
10.	徳田一徳『花影』	1940年7月	8	○	○	○	○
11.	若林つや『午前の花』	1940年7月	12	×	○	×	○
12.	岡田三郎『冬去りなば』	1940年9月	3	×	×	×	○
13.	小田嶽夫『あたゝかい夜』	1940年10月	10	○	×	×	○
14.	真杉静枝『万葉をとめ』	1940年11月	11	×	○	○	○
15.	中村地平『陽なた丘の少女』	1940年12月	9	○	○	×	○
合計				○ : 10 × : 5	○ : 10 × : 5	○ : 4 × : 11	○ : 10 × : 5

示している通りである。十五冊中の五冊以外は、何らかの形の序跋文があり、主に書誌情報などが述べられている。更に、収録作品群がなぜ「作家自選」に選ばれたのかということも語られている。その中から、いくつか確認してみよう。

例えば、最初に出版された富澤有為男『夫婦』で「自分の好きなものを十ばかり挙げ、更に平常自分の作品を愛して呉れる人達の意見に徹して、この六篇を選んだ」と記され、この組み合わせで改めて読んでもらうことが意識され、作家自身により作品が選ばれたこともうかがえる。あるいは、外村繁『風樹』で「私の全作品の中から、殆ど代表作ともいふべき作品を選んだ。従つてこれは自分の持つ全貌ともいふことが出来やう」と記され、選択された作品は作家自身をも代表することが読み取れる。最後に出版された真杉静枝『万葉をとめ』では「ただ、なんとなく自分で、愛著のある作品なので、この中に入れることにした」と述べられている。更に「やはりこれも、なんとなく、好きな作品なので入れることにした」と作品を選択した理由が「なんとなく」と説明されているが、同時に作家自身の「愛著のある作品」や「好きな作品」だからこそ選択されたことは、シリーズの趣旨に重なっているとも言えよう。ここで紹介した序跋文はいずれも人文書院のシリーズ「作家自選」のテーマを表現しており、その目的と合致していることもうかがえる。こうした序跋文の表現を太宰と比較して確認してみよう。作品『思ひ出』や『富

嶽百景』 エッセイ集『餘瀝 近事片々』の無題序文には次のような言説がある。

けふまで創作集が五冊出ているから、それぞれの出版主にお願ひして、一冊から一篇づつ抜き取ることを許してもらつた。／之等、五つの小説は、決して傑作では無い。けれども、「思ひ出」といふ標題を打つて、一本にまとめてみると、自らまた別の感慨も湧くのである。きふ迄の、三十年の生涯の、冗談でない思ひ出になつてゐるのである。／以上の五篇の創作にて、私のこれまで歩いて来た経過の、だいたいには、推察していただける事と思ふ。

他作家の序文と比較すると、「作家自選」が表現されているとは言い難いが、『思ひ出』の無題序文から太宰が意識的に五つの作品を選んだことが読み取れる。また、太宰の無題序文には、自分のイメージをつくらうとしている言説もある。作品集『思ひ出』の作品群は、「私のこれまで歩いて来た経過」とあるように、作家イメージを表現しようとしているのである。

シリーズの序跋文で、まさに「作家自選」が表現され、作品集の意図が表現されていることも確認できる。ただ、例えば寺崎浩や徳田一穂の場合は、序跋文があるにもかかわらず、

作品群の選択に関する言説は見当たらない。その代わりに、作品に関する成立情報や書いていた時の思い出話、各作品の虚構性の強調がうかがえる。また、大鹿卓の作品集『千鳥丸』収録作品は全て富澤有為男が選んだことが「序にかへて」で書かれている。一方で、太宰治の場合、作品を選んだ理由が独特であることは無題序文に書かれているが、後ほどこれを詳細に分析し、太宰治『思ひ出』の無題序文は自己宣伝という機能を果たしていることを明らかにする。

5、初出単行本と個人全集との差異

序文が作品の前にあると、作品の読み方はどのように影響されるのだろうか。例えば、作品『思ひ出』の前にある無題序文には、「自分を「いい子」にしないやうに気をつけて書いた」という一文がある。これを作中「第一章」の「学校で作る私の綴り方も、ことごとく出鱈目であつたと言つてよい。私は私自身を神妙ないい子に綴るやう努力した」と併せて読むことはあり得るだろう。このように、作品の外側の「自分を、「いい子」にしないやうに」と作品の内側の「神妙ないい子に綴るやうに」とを重ねて読めば、作品『思ひ出』の自伝性が強化されるだろう。作中の語り手が一人称「私」であることで、無題序文の書き手である「(太宰)」は作品『思ひ出』の書き手にもなる。更に収録先である『晩年』が「私の第一創作集」であることを鑑みると、本作が自伝的作品とし

て自覚的に提示されていることが分かる。また、作中の「いい子」という語に関して、『思ひ出』の語り手は綴り方において「いい子」であるように意識的に振る舞うし、それによって「私自身」は他の人に褒められる。この語り方では、「いい子」にしない様子がないものの、作品の続きには「剽窃さへした」とあり、褒めてもらうために主人公は雑誌から他の作文を「そつくり盗んだ」という。この箇所は「自分を、「いい子」にしないやうに」描写されていると読み取れるが、『思ひ出』全体においてはそうした様子がない。

このように序文と作品の齟齬が読み取れる。無題序文における『思ひ出』の提示は、事後の評価からすれば効果はなかったのではないか。とはいえ、齟齬こそが、作家自身が自作を見直している証と解釈することもできる。後の評価はむしろ無題序文を重視していないことを示唆すると言える。一九四一年一月に発表された『東京八景』(初出『文学界』以降、『思ひ出』はしばしば「遺書」として読まれることが多くあった。早くに宮田戊子が「太宰治の『東京八景』その他」⁽¹⁹⁾の中で、「彼は一生懸命に『思ひ出』なる創作に没頭してゐた。それは自分の遺書がはりだと考へてゐた」と述べているように、『東京八景』の中身と併読していることがうかがえる⁽²⁰⁾。

しかも、作品『思ひ出』の前にこの無題序文が提示されるのは人文書院版『思ひ出』だけである。既述したように作品

集『思ひ出』は太宰の生前には再び出版されず、没後も出版されなかった。ならば、この作品集の六つの無題序文はどのように扱われてきたのだろうか。現在の状態を先に述べると、「随想」のように扱われている。太宰治の個人全集においては『思ひ出』の六つの無題序文は筑摩書房版『太宰治全集』第十一巻「随想」の中に収録されている。確かに収録先が「序跋・後記」の中であることは目次及び中扉で見えるが、巻名が「随想」であるため、実際に収録場所を確かめるまで、「随想」類として扱われることになるだろう⁽²¹⁾。

人文書院のシリーズ「作家自選」の他の作家の場合をここで確認してみよう。個人全集を有する作家は中谷孝雄『中谷孝雄全集』(全四巻、講談社、一九七五―一九七六)及び『中谷孝雄全集』(全三巻、新学社、一九九七)をはじめ、中河與一『中河與一全集』(全十二巻、角川書店、一九六七)、外村繁『外村繁全集』(全六巻、講談社、一九六二)、丸岡明『丸岡明全集』(全三巻、新潮社、一九六九)、中村地平『中村地平全集』(全三巻、皆美社、一九七一)である。太宰の場合は、これまで個人全集は八雲書店から出版された全集をはじめ、創芸社版全集、筑摩書房版全集を経て十三回出版されており、筑摩書房版全集の第一回から新しい資料や作品を含め、今日に至るまで出版され続けている⁽²²⁾。個人全集の巻数や出版回数は作家によるが、ここで注目すべき点は、太宰治を除いて、これらの作家たちの個人全集には、人

文書院「作家自選」にあつた序跋文が一切載っていないことである。

現在、これらの作家たちの中で最も作品が読まれているのは太宰であるし、最も研究されているのも太宰である。しかし、人文書院版『思ひ出』は従来の研究において、さほど注目されてきた作品集ではない。松本和也論では、作品『思ひ出』の自伝的作品としての受容史が確認され、作品集『思ひ出』の全体構造を踏まえ、「この書物自体が、小説化された太宰治なる作家の半生として意味づけられ、その時「思ひ出」は、太宰治なる作家の幼年期を描いたものとして位置を獲得していくだろう」と述べられている⁽²³⁾。一方、作品集『思ひ出』は同時代の三上秀吉「太宰治著「女の決闘」「思ひ出」」⁽²⁴⁾という書評の中で取り上げられ、『思ひ出』と『富嶽百景』が評価されるが、書物それ自体に収録される無題序文の内容には直接言及していない⁽²⁵⁾。逆に後の評価で、例えば高橋輝次評⁽²⁶⁾は装幀しか見ていない。あるいは、城市郎評⁽²⁷⁾では、解釈はしないものの各無題序文が部分的に引用されている。このように、初版本に収録された無題序文の有無が書評や目録の中を確認できるが、序文は装幀デザイナーと同じように本文に入るまでの場であり、書物ないし作品の性格を決める役割がある。一方、これまで見てきたように、『思ひ出』の無題序文は重視されておらず、こうした役割が看過されてきた。だからこそ、序文の道程を確認し、どのよ

うな形になってきたのかとその意味を解釈する必要がある。

人文書院版『思ひ出』が現存しているため、全集などで随想扱いになってしまった無題序文と原形を比較することができ、個人全集に収録された無題序文と作品との見えなくなつてしまった関係をここで考えたい。既述したように、人文書院版『思ひ出』には中扉の裏側に無題序文がある形は、個人全集になると大きく変形される。単行本にあったレイアウトを残さずに、六つの無題序文に題が与えられ、『思ひ出』序」というタイトルに各序文が列挙されている。初版本における提示の仕方を考慮すると、レイアウトはその順番で読むことを示唆しているのではないだろうか。なお、人文書院版『思ひ出』のレイアウトや順番は作家が決めたか、出版社が決めたかは明らかではないが、いずれにせよ、無題序文を読んだから作品を読むという順番が提示されている形には意味がある。個人全集では作品と序文が別々に収録され、並べて読むことが可能であるが、単行本にあるレイアウトが反映されておらず、『随筆』のような序文と、作品との隔たりが発生する。

人文書院版『思ひ出』にある六つの無題序文が単行本以外の書物にはじめて収録されたのは、一九五六年に出版された筑摩書房版『太宰治全集』第十巻「随想」で、それ以降も同様の形である。この全集が世に出るまで、作品集『思ひ出』収録の無題序文群は単行本にしかなかったのである。しかも、

今なお作品群と無題序文群が共に提示されているのは、人文書院版『思ひ出』のみである。

6. 『思ひ出』の無題序文と自己宣伝の機能

作品集『思ひ出』の全体構造や六つの無題序文における言説は自己宣伝性を強化することがあるということを既に確認した。序文は多くの機能を有するが、『思ひ出』に収録された無題序文にはどのような機能があるだろうか。特に『思ひ出』の収録序文にはもう一つの機能である自己宣伝があるので確認してゆく。

作品集『思ひ出』は太宰治の生前に出版された第七冊目の作品集で、先立つ作品集としては『晩年』、『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ』、『二十世紀旗手』、『愛と美について』、『女生徒』(砂子屋書房、一九三九・七)、『皮膚と心』(竹村書房、一九四〇・四)という六冊がある。これらの作品集の中では『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ』と『愛と美について』に序文があり、前者は「編者」、後者は「太宰治」によるものである。『思ひ出』の六つの無題序文はいずれも作家自身により、「(太宰) ないし「太宰治」と署名されている。これらの作品群の前にある序文の自己宣伝機能を分析し、随筆集の場合を考察する。

『思ひ出』の無題序文群には作品の初出や単行本収録に関する書誌情報、作品の短い説明文がある。単行本収録に関す

る説明は「『』の中に編入されて在る」とあり、第一収録や出版に関する短い逸話ないし思い出話もある。この第一収録への言及は自著を宣伝し、自己宣伝という機能を果たしている作品『思ひ出』の序文には初出や第一収録に関する情報があるが、注目すべきは次の言説である。

「思ひ出」は、昭和七年に書いた。二十四歳である。自分を、「いい子」にしないやうに気をつけて書いた。その翌年、「海豹」といふ同人雑誌に三回にわけて連載した。

これは、砂子屋書房版「晩年」の中に編入されて在る。「晩年」は、私の第一創作集である。なるべく、併読していただきたい。

前半の内容は成立情報であるが、ここで特に見たいのは後半部にある収録情報である。作品集の収録作品は全て以前に収録されたので、各序文にその収録先が書かれている。一方で、他の序文にない表現が「なるべく、併読していただきたい」である。「併読」とは何だろうか。『思ひ出』の序文の内容からすれば、作品『思ひ出』と第一作品集『晩年』の収録作品群の文脈での「併読」、あるいは作品集『思ひ出』と『晩年』という二冊を「併読」することを促しているだろう。他の序文の収録情報に関する表現が次のようになってい

・これは、新潮社版「虚構の彷徨」の中に編入されて在る。あまり売れなかつたやうである。出版部の長沼さんも、気の毒がつて居られた。(『ダス・ゲマイネ』)

・これは、版画荘版「二十世紀旗手」の中に編入されて在る。当時、私に就いての悪評を意とせず、私の創作集を黙つて出版してくれた版画荘主人の厚意は、いまでも忘れてゐない。(『二十世紀旗手』)

・これは、竹村書房版「愛と美について」の中に編入されて在る。「愛と美について」には、五つの創作が収められてゐるが、五篇とも、どの雑誌にも発表しないで、いきなり単行本として出版したのである。前例の少い事と思ふ。私のわがままを許容して、そのやうな冒険を敢へてしてくれた竹村書房主に、あらためて礼を言ひたい。(『新樹の言葉』)

・これは、砂子屋書房版「女生徒」の中に編入されて在る。砂子屋書房の山崎さんには、第一創作集の時から、実に世話になった。これからも、世話になるかも知れない。(『富嶽百景』)

このように、各作品の最初に収録した書物に関する言説はあるが、「なるべく、併読していただきたい」というような自己宣伝の表現がない。それぞれの無題序文には第一収録が

明記されているので、自著への言及であり自己宣伝となる。特に第一収録が示されてから、短い思い出話があることはその書物への関心を持たせる工夫であろう。この作品集は自伝的作品から成り立っているもので、以前の収録の回想を示すことで、その書物にはどういものが収録されているのかを考へさせる工夫となり、これが自己宣伝と同様の機能をしている。

これらの序文における自己宣伝としての機能は、人文書院「作家自選」シリーズの他の作品集にも存在するのだろうか。中谷孝雄『春』をはじめ、寺崎浩『森の中の結婚』、丸岡明『或る生涯』、徳田一穂『花影』の四冊の場合、序跋文において以前に発表した作品や作品集、書物に関する言及がある。例えば、中谷は「跋」において「文学に志してから、十年あまりになるが、作品の数は極めて少なく、著書も「春の絵巻」「くろ土」「滬杭日記」「むかしの歌」及びこの集の五冊である」と自著を指す。寺崎は作品『森の中の結婚』の前にある序文で「これ以後、長篇『愛匂ふ』と私小説的短篇がある」と他の自作に言及する。丸岡は「序にかへて」で「この短篇集は、「生ものの記憶」「柘榴の芽」「悲劇喜劇」に次ぐ、私の四冊目の本に当たるが、短篇集としては二冊目になる」と自著を紹介する。徳田は作品『年賀状』の序文で「夜の庭」「瑕ある海」「余韻」と云った一聯の作品を幾つか書いてみて」と述べ、以前に出版された自作に言及する。確

かに、自著ないし自作が言及されるが、「併読」するように促す自己宣伝はいずれの序跋文にも見当たらない。すなわちこのように直接序文で自己宣伝を行っているのは太宰だけである。

太宰治の他の作品集の序文にも自己宣伝として捉えられる内容がある。例えば、一九四二年五月に刊行された、竹村書房版『老ハイデルベルヒ』という作品集がある。「序」の一部に「いまだ両書を読まぬ人だけが、買ふとよい。両書を読んだ人も、この新しい編輯に依つて読み直したいと思つたら、買ふがよい」⁽²⁸⁾と書いてある。確かに、この書き方からすると、既に読んだことがある人は以前の書物を買わなくていいという意味に解釈できる。しかし、自己宣伝という機能を考慮すると、このような以前の書物への言及は、併読を促す自己宣伝に合致する書き方となっている⁽²⁹⁾。また、一九四六年八月刊行のあづみ文庫版『玩具』の「あとがき」には「晩年」の初版は一九三六年に砂子屋書房といふところから出版せられた。いまから十年前である。のちに縮刷版も上梓せられた」とあるように『晩年』への言及がある。これも自己宣伝として解釈することもできるが、序跋文に併読や購入という表現が露骨に出てくるのは『思ひ出』と『老ハイデルベルヒ』に限定されている。

結果的、『思ひ出』の無題序文における自己宣伝という機能は、どのような意味を持つのだろうか。太宰はいわゆる

「私小説家」ではないということがしばしば論じられるが、この無題序文の内容を見ると、自己宣伝をしていることがうかがえる。無題序文には丸括弧つきの「(太宰)」の「三十年の生涯の、冗談でない思い出になつてゐる」とあり、更に、随筆集の無題序文は丸括弧なしで「太宰治」と署名され、「以上の五篇の創作にて、私のこれまで歩いて来た経過の、だいたい、推察していただける事と思ふ」とあることで、作家の人生と併読することが促される。こうした作家像が作品像と重ねられ、『思ひ出』の収録作品が太宰治の自伝的な作風を持つ、すなわち自伝的作品群になると思われる。

7、おわりに

本稿では太宰治の作品集『思ひ出』をパラテクスト的な観点から分析した。特に作品集に収録されている六つの無題序文における自伝性と自己宣伝という機能を論考し、その意味を解釈した。作品集『思ひ出』の特徴は無題序文だけではなく、本書が人文書院のシリーズの一部であったという点に見出すことができよう。なぜかという点、従来の研究においては無題序文だけでなく、本書がシリーズに属するものであったということもまた、意味が分析されてこなかったからである。本稿で考察したように、太宰治の単行本は単独に出版されたばかりでなく、他の作家たちの書物と共に出版されたことが多く、太宰がネットワークの一員という意味も考え直す

必要があるのではないかと考えられる。

また、本稿で、単行本のパラテクスト的要素を意識することで、その形にしかない事柄を見出せることを指摘した。作品集『思ひ出』の無題序文と作品とが相互関係を持ち、この無題序文における自己宣伝が作品『思ひ出』と第一作品集『晩年』を特に強く結びつけている。無題序文の中にも自己宣伝として機能する言説が見られ、以前に出版した作品集を読むように直接促す言葉作品『思ひ出』の無題序文のみであるが、他の序文では以前に出版した書物に関心を持たせる工夫があることが分かった。自己宣伝の機能については更なる分析が必要であるが、これまでの論考は改めて序跋文を解釈するための方法論として貢献できるのではないだろうか。

注

- (1) 『作品倶楽部』一九三九・七
- (2) 『現代作家卅人論』竹村書房、一九四〇・十
- (3) 『文学界』一九四一・九
- (4) 『われわれの科学』一九四六・六
- (5) ちくまライブラリー、筑摩書房、一九九二
- (6) 安藤宏編『太宰治 展望』ぎょうせい、二〇〇九
- (7) 『Fiction』二〇一〇・十
- (8) 秀明出版会、二〇一五
- (9) ジェラルド・ジュネット著、和泉涼一訳『スイユ』（水声社、

- 二〇〇一)の「第八章 オリジナルな序文の機能」を参照。
- (10) 前掲ジュネット『スイユ』の「第八章 オリジナルな序文の機能」及び「第九章 その他の序文、その他の機能」を参照。なお、序跋文の機能は非常に多く存在し、簡潔に説明できないため、本稿において作品像と作家像がどのように「自己宣伝」として捉えられるのかを考察する。
- (11) 山内祥史「太宰治「思ひ出」の書誌——「餘瀝 近事片々」に関する全集逸文の紹介を兼ねて——」(『日本文芸研究』一九六七・十二)
- (12) 「太宰治文学館 解説書」日本近代文学館、一九九二
- (13) 奥野健男「解説」、太宰治著『晩年』(新潮文庫、一九四七・十二)、改訂版は一九六八年四月以降で、引用は二〇一三年六月版に拠る)
- (14) 例えば松本和也「自伝的受容の形成／虚構の物語の現出——「思ひ出」I——」(同著『太宰治の自伝的小説を読みひらく——「思ひ出」から「人間失格」まで』立教大学出版会、二〇一〇)では『思ひ出』収録作品は「自伝的小説」としてジャンル化されている。
- (15) 花田俊典『太宰治のレクチュール』(双文社出版、二〇〇一)
- (16) 例えば前掲著書をはじめ、『愛と美について』の書誌(一)、『日本文芸研究』一九六九・十二、『愛と美について』の書誌(二)、『日本文芸研究』一九七〇・四、『人物書誌大系
- 7——太宰治』(日外アソシエーツ、一九八三)等。
- (17) 山内祥史(一九六七)前掲
- (18) 例えば、新潮社版『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ』(一九三七・六)は「新選純文学叢書」に所属している。他に版画荘版『二十世紀旗手』(一九三七・七)は、富澤有為男『地中海・法延』(一九三七・六)や大鹿卓『潜水夫』(一九三七・六)と共に「版画荘文庫」に所属する。これがまさに「ネットワーカー」ということであり、文壇の作家たちのつながりほどは言い難いが、同じ時期にデビューした仲間と活動し、同シリーズに書物を出すことを指す。
- (19) 大槻憲二・宮田戊子編著『近代日本文学の分析』(叢書関書房、一九四一)
- (20) 『東京八景』の文脈と『思ひ出』の「遺書」について、拙論「太宰治の初期作品『思ひ出』のリパッケージ——自作引用・言及の方法」(『Future Japanology』第一巻、Brown Press、二〇一〇・五)を参照された。
- (21) なお、近年に出版された柏艸舎版『心の王者 太宰治随想集』(二〇一八)があり、この随想集は筑摩書房版の本文を使用している。ただ、目次等に「序跋・後記」のような言説がない。
- (22) 滝口明祥『太宰治ブームの系譜』(ひつじ書房、二〇一六)などを参照。
- (23) 松本和也(二〇一〇)前掲
- (24) 『文学者』一九四〇・八

(25) この評価には作品集『思ひ出』が直接言及されないが、「氏の眼は意地悪ではないのである。ものごとにつきすぎてゐないが、自ら卑下する態度が、生地のまま、美しく、この作品をうつくしくしてゐるのである」とあるように、無題序文の内容が反映されているとも考えられる。

(26) 『著者と編集者の間——出版史の森を歩く』武蔵野書房、一九九六

(27) 『初版本——現代文学書百科』桃源社、一九七一

(28) 「両書」とは、竹村書房刊行『愛と美について』と『皮膚と心』である。

(29) なお『老ハイデルベルヒ』には、無署名「老ハイデルベル

ヒ」(小説集) 大宰治著『三田文学』一九四二・九」という書評があるが、収録作品を改めて別の作品集に収録することが批評されている。

付記 なお、本稿は二〇二〇年度十二月に大阪大学に提出した博士學位申請論文の一部に修正と加筆を施したものである。

(おだぎりじえいく／本学大学院博士後期課程)

Title	無題序文における自己宣伝の機能 : 太宰治の作品集『思ひ出』を中心に
Author(s)	小田桐, ジェイク
Citation	阪大近代文学研究. 19 P.37-P.52
Issue Date	2021-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/81790
DOI	10.18910/81790
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University